

11 日本近代経済の父・渋沢栄一

1867年に開催されたパリ万国博覧会に参加するために派遣された欧州使節団の随員の一人に、渋沢栄一（1840-1931）がいます。渋沢は、パリ万国博覧会に参加した後、ヨーロッパ各国を歴訪した徳川昭武¹に随行し、ヨーロッパの目覚ましい産業の発展や軍事力を目の当たりにしました。昭武のフランス留学に伴って一年余りをフランスで過ごし、近代国家の在り方を実際に目にしたことが、当時の日本が抱えていた多くの問題に取り組む原動力となったと言われています。



渋沢栄一（国立国会図書館）

帰国後、渋沢はフランスで学んだ株式会社の仕組みを参考にして、明治政府からの貸付金を元本として商社と銀行を合わせたような組織（商法会所）を設立しました。その後、当時の大蔵大輔（現在の財務次官）であった大隈重信からの要請で、1869年に大蔵省の官僚になり、富岡製糸場の設立に向けた調整を担いました。また、1872年に国立銀行²の設立を可能にする国立銀行条例の制定にも尽力しました。1873年に大蔵省を退官した後に、日本初の銀行で最初の株式会社でもあった第一国立銀行を設立しました。この他、鉄道会社、製紙会社、ガス会社、電力会社、セメント会社、ホテル、保険会社、ビール製造会社など幅広い分野の会社や証券取引所の設立に関与し、その数は500を超えと言われています。このことから渋沢は、「日本近代経済の父」又は「日本資本主義の父」と言われています。

また、渋沢は学校や病院の設立を通して社会事業にも熱心に取り組み、関与した施設の数も600にも及ぶと言われています。1924年には、当時の駐日フランス大使で詩人でもあったポール・クローデルとともに、日仏文化と学術の交流を図ることを目的として日仏会館を設立しました。

2024年に日本の紙幣の変更が予定されており、新一万円札の図柄には渋沢の肖像が採用されました。

掲載日：2022年1月4日

¹ 江戸幕府最後の将軍であった徳川慶喜の異母弟

² アメリカのナショナル・バンク（国法銀行）をモデルとした民間出資による銀行で、1882年に中央銀行である日本銀行が設立されるまで、紙幣の発行を担った。